復興庁男女共同参画班は、2021 年 10 月 10 日～10 月 17 日の間、岩手県及び岩手県男女共同参画センター主催、「2021 年度いわて男女共同参画サポーター養成講座」及び「2021 年度いわて男女共同参画の視点からの復興・防災に関する研修会」の一環として、動画配信によるオンライン講座【東日本大震災から10年　女性の視点から考える復興と伝承～防災・減災について～】を開催しました。

◆ テーマ：東日本大震災から 10 年　女性の視点から
考える復興と伝承　～防災・減災について～

講師：大内　幸子（おおうち　ゆきこ）氏
仙台市地域防災リーダー（SBL）
福住町町内会副会長　防災・減災部長
せんだい女性防災リーダーネットワーク代表

◆ 講座概要

大内氏の住む福住町（仙台市宮城野区）は、過去に台風や豪雨による水害を度々経験し、東日本大震災でも大きな被害を受けた。 福住町では、過去の災害経験が生み出した「福住町方式」と呼ばれる地域防災活動が続けられており、東日本大震災以降、その取組は地域の防災モデルとして全国に知られている。講座では、過去の災害時の被害状況や避難所の様子を多くの写真を使って具体的に伝えるとともに、東日本大震災を知らない子ども達が増えている中で、どのように伝承をしていくかを考えること、また、日頃行っている地域防災活動やその成果について語られた。

具体的には、仙台市地域防災リーダー（SBL）の活動の様子、SBL のメンバーが立ち上げた「せんだい女性防災リーダーネットワーク」の取組、福住町の防災訓練の様子、東日本大震災後、女性が避難所運営に参画したことで、運営マニュアルや取組が改善された事例などを紹介し、女性が避難所運営に参画する大切さを伝えた。

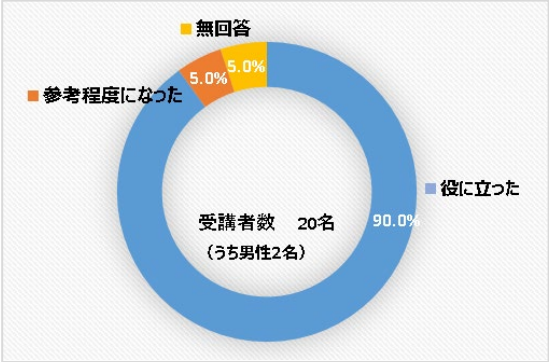
また、福住町では小・中学校の授業の一環として、防災教育・訓練を行っている。地域コミュニティと学校との連携は、子どもたちを災害から守るために、災害が起きる前に準備することが大切だと説いた。

さらに、最近の取組として、新型コロナウイルス感染症対策を考慮した避難所開設シミュレーションやそれにより見えてきた課題やその対策について紹介した。

「備えること」、「知識を得ること」、「訓練をすること」、そして、「忘れないこと」が、命が助かる事、命を助ける事につながると締めくくった。

◆受講者のふりかえり

Q.講座の内容はいかがでしたか？



Q.気づいたこと、印象に残ったこと等をご記入ください。

- 「防災は日常生活そのもの」というフレーズが印象的だった。
- 福住町は祭りや防災訓練等を紐づけして、楽しみながら防災意識を高め、各世代や女性と男性の連携が機能していることが凄いと思った。
- 震災前からの名簿・マップの作製、地域でのコミュニケーションづくりなど継続的な取組が、東日本大震災を乗り越える大きな力になったものと思う。一度経験したことを忘れず、次に生かす地道な取組が、人の命を救う、地域力に繋がっていた。 また、防災を通じての取組が、普段の地域での見守り体制にも繋がっていた。
- 過去の災害の経験から町内の人たちが自ら動き、できるだけ行政に頼らない地域力をつけ、日本一災害に強い町内会を目指し、その延長線上で災害時の協定を結ぶまでに至った行動力がとても素晴らしいと思った。
- 東日本大震災から 10 年半が過ぎて、あの震災を知らない子どもたちに根気よく伝承していくこと、忘れないことの大切さをあらためて、実感した。
- 大変な時こそ、自分のことだけではなく、周囲の大切な人達を守るために、知識を得て、実践していくことが重要だと学ぶことが出来た。
- 自分たちの地域は自分たちで守る、日頃から顔がわかる関係づくり、という言葉が印象的だった。地域行事も子どもが成長するとともに縁が無くなってしまうので、継続する仕組みづくりを考えたい。また、コロナ禍の避難所運営についても考えさせられた。